

モンベル代表

辰野勇 パンシェ家族との出会い

自転車の世界を旅するスイス人、パンシェ家族と初めて出会ったのは2016年の夏、北海道東川町で開催された「シートウーサミット」の懇親会のことだった。南富良野町でガイド業を営む旧知の友人、小林君のゲストとして紹介された。

2010年8月、スイスを後に自転車でユーラシア大陸を目指したグザヴィエとセリーヌは、2013年マレーシアで第一子ナイラを出産した。生後4カ月の幼子を連れて彼らはオーストラリアの灼熱の砂漠を含め3470^{キロ}の旅を終え、ユーラシア大陸から、一旦母国に帰り、講演会や本を出版して資金を蓄え、アジアに向かった。その旅の途中に訪れた北海道で小林君と出会いホームステイさせてもらっているのだという。ナイラはすでに3歳になっていた。活発で何事にも興味を示す利発な女の子だ。彼らにとって北海道は自転車で旅するには最高の環境だという。道が広く、キャンプサイトがいたる所にある。治安も良く、食料や日用品も容易に入手できる。なにより出会う人々が優しい。その後本州に渡った彼らは、奈良の私の自宅にしばらく滞在して、四国、九州に旅立った。徳島では野田知佑さんのお宅で釣りやカヌーなど楽しい日々を過ごした。

九州から韓国、台湾を経てマレーシアに渡り第二子を出産した。次女、フィビーの誕生である。彼らが出産地をマレーシアに選ぶには理由がある。まず「Water birth」すなわち、水中出産のシステムがとれている事。そしてそのコストが日本の半額以下であり、気候もよく産後の生活費も節約できる。プール付きアパートの賃料は月額わずか3万円という。

フィビーが誕生してわずか4カ月後、ユーラシア大陸を目指す旅が再び始まった。中国に入り、バイカル湖を経由してゴビ砂漠の横断に挑戦した。

ナイラの初旅はオーストラリアの砂漠横断だったが、フィビーはゴビ砂漠という、まさに絵に描いたような「アドベンチャーファミリー」である。

壮大なモンゴルの大自然に包まれて夏を過ごした。夏とはいえど夜はマイナス5度まで下がるテントの中で、家族は寄り添って過ごした。時には遊牧民のゲルで歓待を受け、山羊のミルク茶で身体を



日本の春を楽しむパンシェ家族



筆者と交流するナイラとフィビー

温めた。見渡す限り続く一本の道。心が折れることもあったが、ひたすら自転車を漕ぐ。最も大きな障害は砂漠を吹き抜ける向かい風だった。100^{キロ}以上の荷物と二人の幼児。ギアレシオ（歯車の比率）を最大にしてもペダルは重く進まない。景色は一日中変わらない。そんな日々が続いた。4歳のナイラは自力で小さな自転車を漕いで両親の負担を助けた。思いやり、励ましあい、家族の絆は深まった。

台湾でひと冬を過ごした彼らは、アメリカ大陸を目指してアラスカに飛び立つ前に再び日本を訪れた。5歳になったナイラは私を見るなり飛びついた。

「一期一会」

旅の途上で出会う数えきれない人々との再会は稀に違いない。ナイラは別際に必ず「またね」という。子供心に、覚えた日本語で再会を願う思いが込められていた。私は彼女を抱き上げた。少し重くなった。そしてたくましくなっていた。聞きわけもでき、以前よりもっとやさしくなっていたように思う。妹フィビーの面倒をみる姉の貫録さえ感じられた。

おりしも開催される「モンベルフレンドフェア」で、彼らの冒険談を披露してもらう事にした。そしてこの機会に「モンベルチャ



チャレンジアワード授賞式—2019フレンドフェアにて

レンジアワード」を授与することにした。

チャレンジアワードは、2005年に始まり、これまで8名の受賞者を選定してきた。対象は「何か偉業を成し遂げた結果」ではなく、その計画や未だ挑戦しつつあるプロジェクトを評価する。この過去2年間、対象者がなかった。私はパンシェ家族こそ、それにふさわしいと考えた。彼らの旅の資金は講演会や本の出版でまかなってきた。シンプルな生活に不自由は無いとは言うものの、ビザの取得や航空運賃などそれなりの資金が必要だ。アワードの賞金が一助になれば幸いである。「授賞式」を会場のステージで行い、彼らのプレゼンテーションを受けた。グザヴィエの撮りためた世界の素晴らしい写真と映像を画面に映し、セリーヌがその旅物語を朗読した。

「これまで怖い思いをされたことはありませんか？」会場からの質問にセリーヌは明確な答えを返した。「一度だけ、凶器を手にした人がテントを覗きに

来ました。でもそれは、テントを張っているのが誰なのか、危害を加えられるのではないかと、相手も恐れていたからです」

これまで現地の人々を信じて裏切られたことは無いと言う。彼らにとつての「困難」とは、嵐や人災といった外的なものではなく、むしろ内面的な「不安」や「恐怖」であって、いかに

「心の平穏」を保つことが出来るかが最も大きなチャレンジだという。大自然のなかで家族4人、時にはいさかもあるが、次のステップに向けて協力し合わなければ生きていけない。

「子供たちの教育はどう考えていますか？」セリーヌは答える。

「世界のさまざまな環境で、人の優しさを知り、野生動物に出会い、お買い物をする。こんなすべての体験が子供たちの勉強です」

母国語であるフランス語や英語、あるいは算数などは「ホームスクール」と称してテントで両親が教える。行く先々の言葉を身に付けた子供たちは片言で現地の人々とのコミュニケーションをとっている。

地球こそが、彼らにとつての学校なのだ。2010年から旅をはじめ、二人の子供を出産して、来年2020年には一区切りをつけるかもしれないという。

「でも、こんな生活が幸せだと思えるうちは、きつと旅を続けるでしょう」セリーヌとグザヴィエは答えてくれた。傍らの子供たちは、何の不安も無い素敵な笑顔で両親を見上げていた。



「モンベル・チャレンジ・アワード」についてはウェブサイトをご覧ください
<https://about.montbell.jp/social/challenge/award/>